



東大寺の古文書・典籍調査

奈良の東大寺は、日本有数の質・量を誇る古文書・典籍を所有しています。その中には、まだ調査されておらず、何があるか分からない状態のものもかなり残っているのです。文化遺産研究部歴史研究室では、2001年度から2004年度にかけて科学研究費補助金の交付も受け、それらの調査を続けてきました。

調査対象資料は、函の数にして125函にも及びます。量が膨大なために、従来は手を付けられなかったのです。そこで今回は、多数のノート型パソコンを調査現場に持ち込み、データを直接パソコンに打ち込むなどして、できるだけ量をこなすことに努めました。その結果、4年間で1万2千点以上の資料を整理できました。

その中身の大半は、江戸時代の近世資料です。今まで東大寺の研究は、古代・中世史が中心でしたが、今回の調査で、近世東大寺を研究する基盤ができつつあります。近世とは、現存大仏・大仏殿が完成したのもこの時代ですし、現在の東大寺・奈良の直接的原型が形成された時代と言えるでしょう。

また、何があるか分からない資料群ですから、思わぬ発見もあります。例えば写真左下をご覧ください。これは平安時代から中世にかけての經典です。糊が

はがれて、巻物がバラバラになった形で残っていました。しかし現在では經典のデータベースもありますので、断簡でも、どのお経のどの部分の断簡かを確定することができます。現在の版本と根気よく対照させれば、本来の形を復元することができます。

また、資料を収める函にも、実は古い函があることが分かりました。写真右下の函をご覧ください。この蓋の内側には、文書が貼り付けられています。文書の検討から、この函は、鎌倉時代に東大寺にあった世親講という組織が、メンバーへの助成金を運用するために用いていた函であることが分かりました。当研究所の光谷拓実の測定によると、板材の年輪年代は平安時代にまで遡ります。函の作りも丁寧で、鍵もかかるようになっています。助成金を大切に運用していた、昔の人の心構えが伝わってきます。

その他、平安時代の文書の断簡が見つかり、すでに国宝に指定されている東大寺文書と接続したものもあります。これら未整理の資料は、歴史研究にとってはまさに宝の山なのです。

ただし、調査はまだまだ続きます。今回把握した125函のうち、一通り調査したのは現状で50函まで。まだ全体の半分程度です。これからも継続的に調査し、その全体像を把握する努力が欠かせません。

(文化遺産研究部 吉川 聡)



調査風景(大般若経の整理)



文書が納められた函(世親講の函)